



歯学だより Vol. 6



2011 年

岡山大学歯学部
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系
岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

目次

◇ 学部長より			
「リーダーシップとチームワーク」	岡山大学歯学部長	松尾 龍二	4
◇ 副病院長より			
「岡山大学病院（歯科系）の現況と近未来」	岡山大学病院歯科系代表副病院長	佐々木 朗	5
「岡山大学病院（歯系）の教育の現状」	岡山大学病院副病院長（教育・研究担当）	森田 学	7
◇ 退職・新任・転出教員より			
【退職】			
「退職のご挨拶」	生体材料学分野	鈴木 一臣	8
【新任】			
「ご挨拶」	口腔病理学分野	辻極 秀次	9
「講師着任のご挨拶」	歯周科	峯柴 淳二	10
「着任のご挨拶」	口腔微生物学分野	中山 真彰	12
「着任のご挨拶」	口腔外科（再建系）	森谷 徳文	13
「着任のご挨拶」	歯科麻酔科	新井 由起子	14
「着任のご挨拶」	歯科保存修復学分野	大原 直子	15
「着任のご挨拶 一心の内を見つめ、心に火をつけるー」	インプラント再生補綴学分野	峯 篤史	16
「着任のご挨拶」	咬合・有床義歯補綴学分野	黒住 明正	17
「着任のご挨拶」	歯周科	山口 知子	18
「着任のご挨拶」	歯周病態学分野	山城 圭介	19
【転出】			
「南国・高知より」	高知大学医学部歯科口腔外科学講座 准教授	山田 朋弘	20
「国立療養所 栗生楽泉園 赴任のご挨拶」	国立療養所 栗生楽泉園	園井 教裕	21

◇海外より			
「ウイスコンシン州マディソンより」	歯科麻酔科	樋口 仁	22
◇留学生レポート			
“Where is Oshin”	歯科矯正学分野	Tarek Abdulsamad Balam	24
◇岡山歯学会奨励論文受賞者寄稿			
「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」	口腔生化学分野	河田 かずみ	25
「学位論文～カナダからの手紙～岡山歯学会奨励論文賞」	予防歯科学分野	江國 大輔	26
◇学生より			
「Student Clinician Research Programに出場して」	歯学部4年次	櫛原 由理	28
◇卒後臨床研修センターより			
「症例検討会における効果的なファシリテーションを考える」			
卒後臨床研修センター歯科研修部門 副部門長 総合歯科 副科長		白井 肇	29
◇大学院より			
「私の大学院生ライフ」	歯科矯正学分野	保崎 留美子	30
◇歯科衛生士室から			
「歯科衛生士の活動報告」	歯科衛生士室	三浦 留美・高橋 明子	31
◇技工室から			
「技工室の近況」	歯科技工室	神 桂二	32
◇診療科トピックス			
「 「スペシャルニーズ歯科センター」の設立と御紹介 」	スペシャルニーズ歯科センター	センター長 江草 正彦	34
「歯科の専門性をチーム医療に生かす―医療支援歯科治療部」	周術期管理センター歯科部門	部門長 曾我 賢彦	36
◇編集後記			37

「リーダーシップとチームワーク」

岡山大学歯学部長
松尾 龍二



皆さんお元気ですか。今回は「リーダーシップとチームワーク」をキーワードにして岡山大学歯学部の将来について考えてみたいと思います。厚生労働省の資料では歯科医師の80%は個人の開業医です。したがって歯科医師(開業医)である以上、自ずとリーダーシップを発揮して診療所を運営し地域医療に貢献する必要があります。また大学に居られる先生も同じでしょう。歯学部には多くの教育研究分野があり、また分野内には特定の研究チームや診療チームがあります。多くの大学人にもやはり大なり小なりリーダーシップが求められます。しかしリーダーシップにはやや厄介な側面もあります。つまり組織の構成員の理解と協力が無ければリーダーシップを発揮することは出来ません。ここにチームワークというキーワードが見え隠れします。

かつてチームワークを旗印に大ブレイクした大学があります。それは米国ノースウェスタン大学の経営大学院(ケロッグ・スクール)です。ケロッグの宿敵は名声高いハーバード・ビジネススクールでした。ハーバードでは多数の企業家・経営者を輩出し、彼らの寄付による抜群の資金力にもものを言わせて、優秀な教授陣を揃えました。もちろん入学者は天才型の人たちであり、抜群のリーダーを養成してきました。これに対抗するケロッグは、「チームプレーができるリーダー」を養成するとPRしたのです。もちろん凡人型の学生をターゲットにする作戦です。これを突破口にビジネスウィークの大学評価では調査開始以来トップ3以内を維持し、1位になった回数最多的大学になりました。

現在全国の歯学部は様々な角度から評価されています。例えば、入学志願者の倍率、臨床実習の実施状況、国家試験の合格率、外部資金の獲得状況、発表論文集、診療患者数などです。これらの評価項目は、我々の日々の努力で改善して行くことが可能です。理想的には、その努力の延長線上に、岡山大学歯学部独自の旗印を掲げることです。それはケロッグの例から解るように、必然的であり、無理がなく、多くの人から賛同されるものでなければなりません。歯学部の場合は、地域性や大学の規模、そして医学部を始めとするパートナーとの関係も大きなファクターとなります。

外資系の会社によく見られる人事体系ですが、多くの小さな組織を作り、多くの若いリーダーがチームワークを高めながら仕事をしています。もちろん組織によっては失敗もあるでしょうが、この人事体系を改める様子はありません。それは「本当のリーダーシップは教えることが出来ない。学ぶしかない。」という認識があるからです。

岡山大学歯学部は様々な評価を受けながら、自ずと将来の方向性が決まりつつあります。そして歯学部の規模は決して大きいものではなく、全員が意見を一致して行動することが可能です。その時に力を発揮するのが構成員の「リーダーシップとチームワーク」です。独自の方向性つまり旗印の本質は、ここにあるのではないのでしょうか。

平成23年3月1日

「岡山大学病院（歯科系）の現況と近未来」

岡山大学病院歯科系代表副院長
佐々木 朗

大学病院は教育や研究、そして高度な医療を提供するという役割を持っていますが、同時に地域から必要とされる病院であることが大切です。そのためには患者の皆様や地域住民のニーズに対して常に変化していくことが必要です。岡山大学病院（歯科系）では、平成 22 年度は患者サービス向上の点から案内板や待合室チェアの全面交換、歯科外来受付の一部改修等を行ってきました。平成 22 年 12 月には特殊歯科総合治療部の組織改革を行いました。その取り組みについて紹介をさせていただきます。

これまで特殊歯科治療部は歯科系の中央診療部門として 3 つの診療室から構成され、その特色を生かして病院にも地域医療にも大きく貢献をしてきました。今回の改組はその実績をもとに、さらなる発展を目指しています。具体的には心身障害者（児）歯科治療と摂食・嚥下リハビリを担当していた第一総合診療室を、「スペシャルニーズ歯科センター（支援歯科部門・摂食嚥下リハビリ部門）」とセンター化を図りました。「スペシャルニーズ歯科」の呼称にはなじみが少ないかもしれませんが、この呼称が時代の流れともいえます。このセンターでは心身障害者（児）の全身麻酔下での歯科治療を担っており、件数も毎年増加しています。中・四国地域における中核的センターとしてその役割を今後も果たしてゆくものと思います。センター化に合わせて診療スペースを拡充し、待合室の診療室内への移設と全身麻酔後の患者管理の必要性からリカバリールームを充実させ患者や患者のご家族にも配慮する改築を行いました。

最近、医科の患者の治療成績の向上に歯科領域の積極的な関与が重要であることについて医師の理解や関心も高くなってきています。岡山大学病院は数少ない医学部・歯学部統合附属病院であるメリットを生かし、高度化してゆく医科医療に対応した医歯連携を基盤とした改組を第二総合診療室について行いました。岡山大学病院では臓器移植や高度のがん化学療法などの最先端の医療が行われております。第二総合診療室は、感染症対策設備を有する治療室として利用されてきましたが、この度、その診療室を医療支援歯科部門（周術期歯科部門・高度医療歯科支援部門）として、がん化学療法や移植医療などの患者、周術期の患者など免疫低下によって引き起こされる菌性感染巣の対処のみならず栄養管理においても歯科的支援を行い、岡山大学病院の医療全体の質を向上させることを目的とした部門です。勿論、従来から各診療科やチーム医療として実践されてきた面はありますが、少し整理をして医科系に向けた歯科系の窓口として専任のスタッフをおき、治療は全診療科の協力体制で臨むこととしました。このような領域が歯学教育や研究面にまで発展してゆくことは、病診連携を通じた歯科受診の必要性を促すことにもつながり、国民の歯科医療の重要性を啓発し、患者の QOL の向上にも有意義だと思っています。第三総合診療室は、静脈鎮静など歯科恐怖症や有病者治療の支援部門としての役割を担ってきましたが、歯科麻酔科の通常業務と重複するため中央部門から歯科麻酔科に統合しました。これらの改組が今後、岡山大学病院のみならず新たな歯科医療の構築に寄与できるよう努力していきたいと思っています。

ハード面では、大学病院に来られるとわかりますが、病院玄関前が一新します。一方向ではありますがバス停から雨に濡れずに病院に移動できる屋根付きの歩道が完成します。また岡山大学病院の核ともいえる新中央診療棟が平成 24 年度末の完成に向けて

基本設計が出来上がり、工事が始まっています。最先端の医療設備を有する 20 部屋の手術室や検査部門が予定されており、日本有数の施設となるものと期待されています。歯科系も手術室を 2 部屋確保しております。予定として 1 室は通常の手術室、もう 1 室は歯科チェアと一般手術台のハイブリッドタイプの手術台の導入を計画しており、インプラントにおける骨移植や再生医療など先進医療における手術の円滑化が図れるものと期待しています。

このように岡山大学病院（歯科系）も発展的に進化しています。地域医療の中核として今後も患者の皆様へ医療、快適なサービスが提供できるように努力してゆきたいと思っています。

新しくなった病院玄関（医学部）



新しくなった病院玄関（歯学部・工事中）



「岡山大学病院（歯系）の教育の現状」

岡山大学病院副院長（教育・研究担当）

森田 学

光陰矢のごとし。昨年度、同じ内容で原稿を依頼されもう1年経ちました。早いものです。私に分かる範囲、興味ある範囲での報告になっているかとは思いますが、この1年を振り返ります。

まずは研修医教育。高い国家試験合格率のおかげで定員65名中55名が採用となりました。歯学部建物の中では一等地ともいえる一角に新しい控室が用意され（羨ましい!）、PCの数が増え（羨ましい!）、教育に活用しているソフトも改良されました（しっかり働け!）。さらに、歯科臨床研修に専任する事務員1名が歯科研修部門室に配置されました。

次は一診教育。患者情報の漏洩が起こらないかと怯え、学生の心身両面の健康に気遣い、教員の負担は増える一方です。しかし、どのライターも懸命に努力しています。ただユニットの老朽化が著しく、一般的には7年で買い替えのところを、何と1997年製で頑張っています。なのに「医療安全」という言葉だけは先行しています。数十万km走った車で安全運転できるのでしょうか。さて、東京大学の濱田 純一 総長は「タフな学生を育てる」必要性を唱えておられます。我々も、いかなる環境下においても「タフな歯科医師」を育てなくてはなりません。その理由については今更言うまでもないでしょう。

そして、コ・メディカル、コ・デンタル教育。1年を通して様々な研修会が開かれています。その中で、私が関係した研修会の一例です。平成22年7月24日、ワークショップ「頭頸部がんチーム医療における口腔ケアの促進」が岡山大学病院腫瘍センター、中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムの後援で開催されました。岡山県内外から医師、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士など約90名参加しました。全国各施設から6名の講師を招き、講演と小グループディスカッションを行いました。多職種の人と意見交換ができ、参加者の満足度も高かったのではないのでしょうか（と願います）。以上、大学病院の役割も多様化してきました。攻めの姿勢と護りの姿勢、硬軟上手く取り混ぜて、社会変化に沿った組織改革（進化）をできるところから始めましょう。



「退職のご挨拶」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
生体材料学分野 鈴木 一臣

本年3月末をもって定年を迎えるにあたり一言ご挨拶申し上げます。私は昭和57年4月岡山大学歯学部助教授に採用され、平成9年2月同教授となって歯科理工学講座（現生体材料学分野）を担当させていただき、現在に至っております。この間、学生教育、研究、管理運営および社会活動等においてその職責をなんとか果たすことができました。これも一重に岡山大学教職員ならびに学生の皆様方のご支援・ご指導・ご協力の賜物であり、深く感謝して御礼申し上げます。なかでも、研究面では国内外142名の共同研究者、歯科材料・器械メーカー12社との出会いや学部・大学院に優秀な学生が入学してくれたことによって私の活動範囲が拡大したことは望外の喜びであります。

近年、物事の全体像を知ってから微視的世界に入っていくことや境界領域のいとなみが極めて重要であることを自身再認識し、学生達にも伝えようと努めています。左下の写真は、月周回衛星「かぐや」が撮影した地球の全体像で、JAXA（宇宙航空研究開発機構）とNHKがインターネット上に公開したものです。かつて宇宙飛行士は宇宙から地球を見て人生観が変わったと言っていました、この映像を見ただけでも神秘的で様々なことを感じ、思いが尽きません。

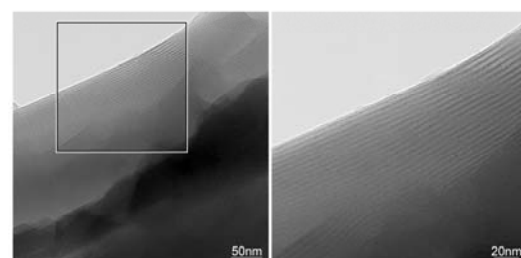
さて、私の研究はコンポジットレジジン系成形歯冠修復材料の物性改良およびその歯質接着システムの開発を主テーマに展開してきました。すなわち、合成シランカップリング材によるシリカ系フィラーの表面改質、芳香族原子団ならびにアミノ酸を骨格とした多官能性メタクリレート分子設計と合成でした。さらに、最近では口腔ケア剤やフィシャーシーラント材の開発などにも硬組織接着研究において培った技術を試みています。

歯科用生体材料にはさまざまな素材が用いられて治療用途に応じて使い分けられていますが、いずれも歯や骨などの生体組織と結合することによって機能を発現することから両者間において成立する界面の性状が極めて重要となります。右下の写真は、本邦で急速に臨床使用頻度が高まっているシングルステップのセルフエッチングシステムにおける接着界面に形成された「リン酸エステル系機能性モノマー（10-MDP）と歯質のカルシウム塩」のTEM像であります。この層が重合することで安定した接着強さが発現されます。

おわりに、科学技術の進歩発展に伴って患者は高度先進医療が受けられるようになりましたが、健康にまさるものではありません。しかし、生体には老化があって「材料・器械」から逃れられないこともまた事実です。岡山大学歯学部の益々のご発展と皆様方のご多幸をお祈りいたしております。

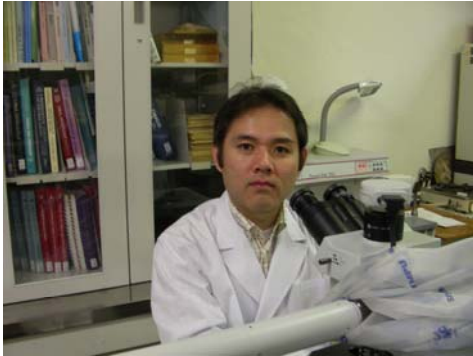


市販品／象牙質の層状構造のTEM像



「ご挨拶」

口腔病理学分野
辻極 秀次



平成 22 年 4 月 1 日付で口腔病理学分野の准教授に着任いたしました辻極秀次です。今回このようなご挨拶をさせていただく機会を与えてくださいました皆様に深く感謝申し上げます。また、永井教之名誉教授、長塚仁教授、山田雅夫教授はじめ、数々のご指導、ご高配を賜りました諸先生方にこの場をかりて厚く御礼申し上げます。

私は、岡山理科大学卒業後、岡山大学歯学研究科口腔病理学の大学院生、同講座の助手、ウイルス学分野の助手を経てこのたび口腔病理学分野の准教授に任命されました。

ご挨拶を書くにあたり、今までの人生を振り返ると実に様々な方とのご縁で今私がここにいと痛感いたします。そもそも理学部出身の私が歯学部で学ぶことになったきっかけは、平田（日比）もとゑ先生（元岡山理科大学教授）との出会いでした。血液学専門の病理学者である先生は非常に個性的で、直接師事していない私をなぜか気にかけて下さいました。卒業後は就職を考えていた私ですが、先生の「辻極君にサラリーマンができるわけじゃないの」の一言で就職を断念し、研究者を志しました。そのご縁で当時の口腔病理学講座教授であった永井先生に紹介していただき、歯学部での研究生活をスタートさせることができました。永井先生には非常に多くの得がたい経験をさせていただきました。アコヤ貝、鮫、等々どれも結果には結びつくことはありませんでしたが、この時期に研究に対する柔軟な姿勢を学び、今の私の礎となっています。大学院卒業後は同講座の助手として採用していただきましたが、その後研究の幅を広げたいという私のわがままから平成 17 年には医学部病原ウイルス学分野に異動させていただきました。病原ウイルス学では山田先生の「当面硬組織研究とウイルス研究を両立させてはどうか」とのお言葉に甘え、結局ウイルス学にいる間硬組織研究を継続させていただきました。永井先生の退職後、長塚先生が口腔病理学分野の教授に就任され、私に「准教授として頑張ってみないか」とお声をかけて下さいました。永井先生からもお口添えいただき、また山田先生も快く祝福してくださり、再び歯学部の地に戻って来ることとなりました。また紙面に書ききれなかった先生方にも多大なるご支援を頂きました。重ねて御礼申し上げます。

まだまだ准教授としての自覚が足りない私ですが、現在までに得た知識、経験をもとに、研究、教育等に精進するのはもちろんのこと、今後とも人との繋がりを大切に日々研鑽していきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

「講師着任のご挨拶」

歯周科
峯柴 淳二



この度、平成 22 年 11 月 1 日付けで岡山大学病院歯周科講師に昇任致しました。私の経歴は平成 7 年に岡山大学を卒業し、第二保存科で研修医として 2 年働き、その後平成 14 年まで医員として働き、1 年半国立療養所邑久光明園に勤務、その後渡米、渡米中に学位取得、4 年弱アメリカ (NIDCR National Institute of Health) で働き帰国。常勤歯科医師として関連病院での勤務を経て岡山大学医歯薬学総合研究科歯周病態学分野助教として 3 年弱勤務し、現在に至っています。

現在、私は岡山大学医学部歯学部附属病院の歯周科で外来医長としても働いています。そこで日々の診療で感じることを少しだけ書かせていただきたいと思います。

時々患者さんが、大学病院なのでちゃんとみてもらえと思ってきました。開業医さんにいていたのですが治らないのできました。ほかの病院でこういわれたのですが本当にそうなのでしょうか？ など、どちらかといえばネガティブな主訴がよく聞かえてくるように感じます。もちろんこれは大学の先生がすごいのもなく、ただ単に大学病院という看板に大きな期待と信頼を抱いてやってきているのであらうと思います。もちろんこの逆の現象もおこっていると思います。大学病院だと思ってきたのに期待はずれだったなど。どちらにしろ、やはりネガティブなキャッチボールのように思います。現在岡山大学病院では特定機能病院として紹介状のない患者さんから特別料金をもらうシステムが導入されています。これは『初期の診療は医院・診療所で、高度専門医療は病院で行う』という目的から平成 8 年 4 月に制度化されました。果たして、このシステム歯科でもうまく働いているのでしょうか？ 歯科では元来ほとんどの先生が開業し、そこですべての処置を行っています。もちろん特殊なケースを除けば。しかし特殊なケースっていったいどんなものなのでしょう？ 紹介すべき症例とはどんな症例なのでしょう？ 逆にいつまでも大学病院に来たいから通院しているという患者さんを大学は抱え続けるべきなのでしょう？ 大学は先ほども話したように高度な医療を展開すべきであって決してほかの医院と同じ種類の患者さんを見、競争してはいけないと思います。独法化され、収益も重視されるようになったこのごろ、果たして高度医療と収入は歯科で両立できるのでしょうか？ 病診連携をうまくとり、治療フェーズによってかかる病院が変わる。いや変える。これがこれからの歯科医療とし

て必要となっていくのではないのでしょうか？患者さんに密着した部分や単位時間当たりのコストの高い部分を開業医さんが受け持ち、時間がかかり手間のかかる処置や専門的機材の必要な治療は大学が受け持つといった分業が必要となるのではないのでしょうか？

歯周科ではこういった状況に対応すべく、システム作りに取り組んでいます。しかし大きな壁はレセプトです。ここをうまくクリアできるかどうかポイントとなるでしょう。大学病院がこれでいいのか？このままでいいのか？利潤だけを追って本質を忘れてないか？開業医さんのために何かできているのか？先端医療を展開できているのか？日頃思っていることをとりとめもなく書きましたが、何か大学病院もかわっていかないといけないと思います。

教員を初めて3年がたちましたが、「臨床・研究・教育」の三本柱の 一つ一つを自分なりに模索しながら少しずつ貢献できればと考えております。最後に、「品位と威厳」をもった歯科医療、研究および教育を提供できるよう努力する所存ですので、ご助言いただければ幸いです。

「着任のご挨拶」

口腔微生物学分野
中山 真彰

この度、平成22年3月1日より口腔微生物学分野の助教職を拝命しました中山と申します。この場をお借りして皆様にご挨拶を申し上げます。

私は長崎大学工学部を修士課程修了後、長崎大学熱帯医学研究所にて医学細菌学を学びました。コレラ菌、サルモネラ菌などをはじめとする感染症研究を行なう中で、主にヘリコバクター・ピロリに関する研究に携わってきました。その後、2008年からNational University of Singapore、Cancer Science Instituteへポスドクとしてがんの基礎研究を行ないました。シンガポール共和国は公用語が4言語、多民族国家であり、ビジネス・商業・観光など、また学問教育、研究なども至る分野で躍動的な国でした。アジア圏のみならず世界中の国情勢の縮図を感じられ、小国ながら得られる情報と多民族性から学ぶべき文化は非常に刺激になりました。

これまでの研究環境は、研究所内での研究活動ばかりでしたが、2010年3月から岡山大学歯学部内での勤務となり帰国致しました。

これまでの研究経験を活かすことはあっても、学生への直接の指導や実習などの学部生への教育面の経験値は低く、多くの先生方、諸先輩方にご迷惑をお掛けしていることと思います。早くそのような状況を克服し、研究・教育に誠意を持って精進して参りたいと思っております。今後とも、ご指導ご鞭撻の程、何卒、宜しくお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」

顎口腔再建外科学分野
森谷 徳文



2010年11月1日付けで岡山大学病院・口腔外科(再建系)の助教に着任し、2月1日付けで大学院医歯薬学総合研究科・顎口腔再建外科学分野に配置換えとなりました森谷徳文です。

ご挨拶を兼ねまして自己紹介をさせていただきます。私は大阪歯科大学を卒業、同大学にて1年間臨床研修歯科医師として勤務の後に岡山大学大学院歯学研究科・第1口腔外科(当時)に進学しました。大学院入学後、1年間口腔外科の臨床について学び、その後3年間は口腔生化学分野で学ばせて頂きました。滝川教授、久保田准教授のご指導で研究を行った3年間はとても忙しく時には体調を崩すこともありましたが、研究の楽しさを知り、また口腔生化学で研究を行っていた同期の大学院生が多かったことも幸いし、大変有意義な研究生生活を過ごすことが出来ました。同期とは熱い議論を交わしたり、時には喧嘩になったり、一緒に飲みに行ったり、もちろん研究に共に励み、刺激し合って、本当に同期が多く居て良かったと今でも思っております。滝川先生、久保田先生また口腔生化学講座の先生方、そして当時の同期の面々にはこの場を借りて御礼を言いたいと思います。ありがとうございました。さて、学位取得の後、早期に留学して研究を継続したいと考えておりましたが、医員として数か月の臨床を行ってから、医局の人事により香川労災病院・歯科口腔外科に勤務することとなりました。同病院では私1人しか歯科医師が居ない上に入院と外来患者さん両方を受け持たなければならず、患者数も多く、それまで研究ばかりで臨床経験不足な私には大変でした。入院患者さんが常に居り、また休日の急患もあったため土・日に研究の継続を行うことが出来ず、約4年間、臨床にどっぷり浸かっておりました。臨床の腕は飛躍的に向上したものの、徐々に研究したい思いが強くなり、香川労災病院は退職して、岡山大学に勤務させて頂くことになりました。その後約3年間、医員として臨床と研究に従事しておりましたがこの度、飯田教授のお計らいで助教に着任させて頂きました。

研究と臨床を上手に両立させ、どちらにおいても成果を挙げることは困難なことだと思いますが、岡山大学歯学部発展のため少しでもお役に立てるよう日々精進していく所存です。今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を頂けると幸いです。どうぞ宜しくお願い致します。

「着任のご挨拶」

歯科麻酔科
新井 由起子

このたび、平成 22 年 4 月 1 日付けで岡山大学病院歯科麻酔科の助教に着任いたしました、20 期生の新井由起子です。

私は、岡山大学歯学部を卒業後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科麻酔・特別支援歯学分野に進学しました。この大学院の 4 年間で、臨床では麻酔全般について学び歯科麻酔学会認定医を取得し、研究では脳の酸化ストレスに対する麻酔薬の影響について研究し、学位を取得しました。

大学院を卒業後、広島大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科麻酔学分野の助教に採用されました。広島大学では臨床と学生教育を主に行いました。広島大学で過ごしたのは結局 1 年間と短かったのですが、いろいろなことを考えさせられた本当に内容の濃い貴重な 1 年間となりました。

そして平成 22 年 4 月に岡山大学へ助教として戻ってまいりました。日々臨床と教育を行っています。最近は新たにペインクリニックに関する研究を始めつつあるところです。

岡山大学の歯科麻酔科は私が入局した頃に比べると医局員が増え、にぎやかになっています。このような環境の中で、人として、助教としていい手本になれるよう、日々努力、向上していく所存です。

最後になりましたが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」

歯科保存修復学分野
大原 直子



2010年4月に、歯科保存修復学分野の助教として着任いたしました大原直子です。今後ともご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

私は大阪府枚方市に生まれ、高校は大阪府立四條畷高等学校です。1986年に長崎大学歯学部へ入学し、計21年間長崎で過ごしました。長崎は異国情緒あふれる親しみやすい街で、地域性か入試制度のためか、全国各地から親元を離れ集まってきた学生が多く、友達や部活の先輩・後輩が家族の如く助け合い伸び伸びとした大学生生活を送りました。大学院生時代は口腔細菌学分野で学び、その後2007年に主人の転勤に伴い上京するまで歯科保存修復学分野に勤務しました。東京では、日本大学歯学部歯科補綴学教室第Ⅲ講座に勤務しましたので、大学や分野の違いを痛切に感じながらの3年間となりましたが、自身を振り返り、力をつけることのできた実りある期間だったと感謝しています。主人の再度の異動のため、このたび岡山大学で仕事をさせていただく機会を得ることができましたことを、主任教授の吉山教授をはじめ関係の皆様にご挨拶申し上げます。

岡山大学病院は、診療スペースも広く患者数も多く、医科との連携も良好で、素晴らしい病院です。また、岡山大学歯学部の学生さんはとても真面目で、教員が部屋に戻るまで廊下で列をなして待つその姿には、頭が下がる思いです。私は、現在までにいろんな場所を経てきたお陰で各地に恩師や友ができましたが、ここ岡山でも新しい出会いに恵まれ、当歯科保存修復学分野の皆様や同門の先生方をはじめ、周りの皆様に支えていただいています。微力ではございますが、診療・教育・研究ともに精一杯頑張る所存ですので、今後とも御指導・御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶 一心の内を見つめ、心に火をつける」

インプラント再生補綴学
峯 篤史



この度、平成 22 年 1 月 16 日付けでインプラント再生補綴学の助教に着任いたしました。そのご挨拶として経歴と決意を記したいと思います。

平成 5 年に 14 期生として岡山大学歯学部に入學し、臨床実習の中で『診療ができる歯科医は材料を使いこなす』と感じました。生体材料学の鈴木一臣教授の部屋を訪ねて、「50 年先の材料学」について質問した 13 年前のその頃を昨日のように覚えています。また、『1 補綴のライターはカッコイイ』という思いから卒後、大学院生、研究生、医員、助手と顎口腔機能制御学（旧補綴学第一講座）で 7 年半の研鑽を積みました。大学院では、矢谷博文教授、鈴木一臣教授の御指導のもと、「Er:YAG レーザー照射歯質被着体の性

質と接着に関する研究」で学位を頂きました。臨床では「歯科金属アレルギー外来」を設置する際に、窪木拓男教授のお手伝いをさせて頂きました。

平成 18 年秋からはベルギー王国の奨学生として留学生生活をスタートしました。ルーベントリック大学（保存学講座）の Prof. Bart Van Meerbeek と Dr. Jan De Munck に公私ともに良くして頂き、接着歯学をより深く学びました。その結果、「年齢と同じ数の publication を！」と勢いで話していたことが現実となりました。3 年間と心に決めていた豊かで、ちょっぴり孤独な欧州生活の終盤、就職活動を行っていたところに窪木教授から今回のポストのお話を頂き、ありがたくお受けいたしました。日本の大学の臨床系に在籍するということは、留学生活で追求してきた“研究”に加えて“臨床”と“教育”がその責務になるということです。

『 ‘臨床’ ・ “教育” ができるとはどういうことなのか？ 』

イエテボリ大学名誉教授 Gunnar E Carlsson 氏は【技術的に完璧な義歯より患者と良好な関係を築くことのほうが、患者の満足度向上にはより重要である。】と発表しています。初志である「材料を使いこなす」を胸に、人の心の内を見つめ続ける歯医者でありたいと思います。また、“教育” も“臨床” と同じくそのレベルが分かりにくいものです。作家・教育哲学者 William Arthur Ward 氏は【凡庸な教師はしゃべる（tell）。良い教師は説明する（explain）。優れた教師は自分でやってみせる（demonstrate）。偉大な教師は心に火をつける（inspire）。】と言っています。はばかりながら、僕はこの“心に火をつける”教育者を目指しています。そのためには、まず自分が燃えていることが肝要です。やりたいことがいっぱい毎日を、元気に過ごせるように工夫したいと思います。

“人と人とが深く信じあい、ひびき合う。そして高いレベルの仕事と勉強をする。”

岡山大学歯学部はそういう所であってほしいと願い、自分もそれを達成・維持する役割を担っているという誇りを胸に、日々気張っていきたいと思います。

皆さま、御指導御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

咬合・有床義歯補綴学分野
黒住 明正



皆様、こんにちは。20 期生の黒住と申します。2010 年の 10 月付けで咬合・有床義歯補綴学分野の助教に任命されましたのでご挨拶申し上げます。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は、岡山市産まれの岡山育ちという生粋の岡山っ子です。岡山大学歯学部に入學後、2005 年に卒業し、咬合・有床義歯補綴学分野博士課程に進学しました。4 年間の大学院生活を経験し博士課程修了後、補綴科（咬合・義歯）の医員を経て現在に至ります。学生自分は卒業したら勤務医を経てすぐ開業という青写真を描いていましたが、臨床実習において歯科補綴学の世界に魅了され気づけば当講座に入局し 7 年目を迎えています。

この度、助教に採用され、「臨床」、「研究」、「教育」という 3 本柱を中心に活動していくことになる訳ですが、着任から約半年を迎えてようやく仕事のペース配分や要領に慣れてきたところです。「研究」、「臨床」と自分の好きなことばかりしてきた大学院・医員時代とは違い「教育」という仕事に携わるようになり「学ぶ」という言葉の意味を考えるようになりました。「学ぶ」という言葉を辞書で引くと「教えを受けて知識や技能を身につける」とあります。未だ経験の浅く未熟な自分にとって研修医・学生の指導をする力を自分自身持っているかということに疑問を持ちながら何とかこなしているという感じではありますが、日々精進しながらこれまで自分が得てきたものを微力ながら患者様、研修医、学生に還元できるよう努力していく所存です。

末筆ながら、今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯周科
山口 知子



この度、平成 22 年 7 月より岡山大学病院歯周科の助教に着任いたしました。これまでにはなかった責任の重さを感じ、歴代の教員の先生方のご苦勞と偉大さを実感している毎日です。

私は、平成 17 年に岡山大学歯学部を卒業し、その後は現在所属している歯周病態学分野の大学院へと進みました。大学院在学中は、歯周病という疾患をもとに、様々な経験や知識を得ることができ、私にとって大変貴重な 4 年間でした。

私は、“IL-6 を基点とした歯周病悪化のメカニズムを解明する”ことを目的に研究を行ってきました。歯周病は細菌によって発症する慢性炎症性疾患です。そのため、私は、歯周病だけではなく、炎症メカニズムの解明という大きな視野をもち研究を進めていくことができました。幸運なことに、大学院修了前には、この研究テーマをもとに日本学術振興会特別研究員として採用され、良い環境の中、研究と向き合うことができました。これまで私が明らかにしたことは、ほんの少し成果でしかありませんが、このことが将来、歯周病で悩む方々の一助となればと思います。

実際、臨床現場では、単純明快なことは少なく、個々に異なる生体反応があり、生活環境、人柄なども加わります。最近になってやっと、このような複雑な病態にも目を向けながら治療をすすめていくことが楽しく感じるようになりました。

4 月からは、教育という面で、今までにはなかった新たな責任が加わります。私自身、学生時代を振り返ってみると、教育していただいた先生方と同じ立場になるとは信じ難い気持ちになります。

臨床・研究・教育のどれにおいても、経験が少なく未熟ではありますが、日々成長していきたいと思います。今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

「着任のご挨拶」

歯周病態学分野
山城 圭介



平成 22 年 4 月 1 日付で歯周病態学分野助教に採用されました 17 期生の山城圭介と申します。よろしくお願いいたします。

私は平成 14 年に岡山大学を卒業後、岡山大学大学院医歯学総合研究科歯周病態学分野（高柴教室）に入局しました。バスケット部の先輩である明貝先生の指導のもと「ヒト歯根膜線維芽細胞における機械的刺激誘導性遺伝子についての研究」を行ってきました。大学院 2 年目の時には日本大学松戸歯学部生化学講座（安孫子教室）に国内留学をする機会を得ることができ、分子生物学について色々と学ばせてもらいました。学位取得後半年間医員として在籍した後、ロサンゼルスにあります University of California 内の、Center for Craniofacial and Molecular Biology という研究所（Dr. Charles Shuler）に留学する機会を得ました。日本においては細胞を用いた研究（in vitro）を中心に行って来たのですが、留学先ではマウスを用いた口蓋裂の研究（in vivo）を行うこととなり、勝手は大変異なっていたのですが、やはり分子生物学的手法を用いた研究ということもあり、大変有意義な時間を過ごすことができました。その後 Dr. Charles Shuler がカナダにあります University of British Columbia の歯学部長に栄転されたことに伴い、妻ともどもロサンゼルスから 2000km ほど車で北上し、昨年冬季オリンピックが開催された街、バンクーバーに引っ越すこととなりました。バンクーバーでは長男を授かることも出来ました。そこで 2 年半の研究生活を終えた後、再び岡山に帰ってきた次第であります。

この文章を見直してみますと、大学入学の際に大阪から岡山に来て以来、実に様々な場所を点々としたのだなあと思えます。どの場所でも新たな発見があり、その都度成長している自分を実感することができました。人を成長させる要因は何に増しても「人との出会い」に尽きると思えます。

良き家族、友人、先輩、後輩、そして指導者に恵まれるほど幸運なことはありません。私は幸いに様々な場面においてこれらの幸運を得ることができました。今度は私がこれらの恩恵を受ける時がきたと実感しております。今後は父として子供の成長を見守り、教員として学生に臨床の指導を行い、指導教官として大学院生に研究の指導を行っていく日々が待っております。私と接することにより少しでも良い影響を与えることができるよう、微力ながらも日々精進して行きたいと思っております。皆様方にはこれからも変わらぬご指導、御鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

「南国・高知より」

高知大学医学部歯科口腔外科学講座
山田 朋弘



岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。私は2009年（平成21）年4月まで岡山大学でお世話になり、現在は高知大学医学部歯科口腔外科学講座の准教授を務めさせていただいております。

私は平成5年に大阪大学歯学部を卒業し、そのまま大阪大学第2口腔外科に8年在籍した後に岡山大学に移動し、平成13年から8年間岡山大学顎口腔再建外科学分野（旧第一口腔外科）でお世話になりました。その間、ドイツ・ミュンヘンへの留学や、多数の症例を経験させていただき、私の歯科医師としての大部分は岡山大学で形成されたと感じています。岡山大学在籍中は、たくさんの先生方にお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

高知大学は昭和51年10月に国立高知医科大学として開設され、平成15年10月に高知大学と統合し、平成16年4月から国立大学法人高知大学医学部として現在に至っています。その中で歯科口腔外科は、高知県における歯科治療の基幹病院の立場にあります。医学部における歯科口腔外科は“ミニ歯学部”的な存在で、一般歯科的疾患から口腔外科的疾患、さらには口腔内科的疾患といった幅広い疾患を扱っています。私は大阪大学時代から顎変形症や口唇口蓋裂等先天異常についての研究を主なテーマとしており、こちらに来てからも微力ながら継続しております。それに加え、高知大学歯科口腔外科学講座が重点的に行ってきた研究・臨床は口腔癌と口腔粘膜疾患であり、着任後はこれらの研究（特に臨床研究）にも参画しています。口腔癌に関しては、超選択的動注療法を積極的に用いて、抗癌剤と放射線、さらには免疫療法を組み入れた治療により腫瘍の縮小・消失を図り、可及的に手術を回避し口腔機能を温存することが目標です。また、教育面では歯科医師を対象とした卒後教育、大学院教育のみならず、医学部生を対象とした卒前教育も行う必要があり、歯学部生に対する教育との相違にとまどいながら試行錯誤の毎日です。

高知大学医学部は太平洋と四国山地に挟まれ、自然の豊かな南国市に設立されています。野菜、果物、魚貝類といった自然の恵みは多く、わが国屈指の食材の土地でもあります。特にカツオのタタキは絶品で、たいていどこの居酒屋でも“ハズレ”はありません。岡山大学の皆様も是非遊びに来ていただけたらと思います。

「国立療養所 栗生楽泉園 赴任のご挨拶」

国立療養所 栗生楽泉園 歯科
園井 教裕

2010年4月1日、全国13箇所にある国立ハンセン病療養所の1つである、栗生楽泉園へ赴任しました、園井 教裕です。岡山大学歯学部及び岡山大学大学院医歯学総合研究科在学中ならびに岡山大学病院在職中、皆様方には何かとお世話になりました。この場を借りまして、改めて感謝申し上げます。

さて、本園のある群馬県草津町は、標高約1200mという高地にあり、全国的に名高い「草津温泉」がある温泉地です。草津温泉は、「にっぽんの温泉100選（観光経済新聞社）」で8年連続1位を獲得中です。

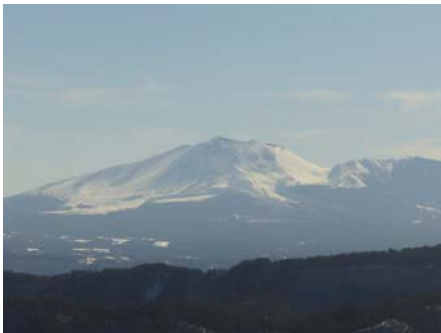
今回、赴任した中で、新発見がいくつもありました。その1つをご紹介しますと、関東でも、『岡山大学歯学部』の名前が確実に浸透してきていることです。

昨年8月、岡山大学歯学部同窓会・関東支部会に出席させて頂いた際、多くの同窓生が関東地方でご活躍されていることがわかったことに加え、テレビ出演されたり、学会や講演会等でご活躍されている先生方が何人もいらっしゃることで、色んな方から『岡山大学歯学部』という名前を耳にする機会がありました。

岡山から遠く離れていても、『岡山大学歯学部』の名前を聞くことが出来たことで、心強くさせてもらえるものがありました。

現在、本園では、歯科診療とともに、NST（栄養サポートチーム）、ICT（感染制御チーム）等の多業種連携の仕事にも積極的に関わっています。昨年は、NST・歯科・看護部合同の定期的な勉強会を立ち上げました。岡山大学病院での経験を活かしつつ、多業種が連携することで、1+1=2ではなく、10にも20にもできるように努めて参りたいと思います。

一方で、国立ハンセン病療養所では、歯科衛生士の定員枠が認められていないという悩ましい問題があります。歯科の専門職である歯科衛生士がいないことは、園内で広範な歯科活動を展開する際、妨げになっていることが否定出来ません。



最後になりますが、岡山大学病院の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、この度、このような機会を与えて下さった編集委員の先生方にも厚く御礼申し上げます。

（左の写真は、本園から見える浅間山です）

「ウイスコンシン州マディソンより」

歯科麻酔科
樋口 仁

現在、私はアメリカ、ウイスコンシン州マディソンにある University of Wisconsin-Madison の Department of Medical Genetics で Post-doctoral fellow として留学生活を送っています。ウイスコンシン州は五大湖の一つミシガン湖の西隣に位置し、マディソンはその中南部にあります。アメリカ第三の都市として知られるシカゴからは車で3時間ほどの距離です。この原稿の依頼を受けた2011年2月には、州知事の政策に反対する大規模なデモがここマディソンで行われ(マディソンはウイスコンシン州の州都です)、日本でも報道されていたので、記憶にある方もおられるかもしれません。普段はとても静かで自然豊かな町ですが、冬の厳しさは一入で、真冬は-20℃の雪の世界です。

私の専門は「歯科麻酔学」なのですが、現在は「麻酔」でも「歯」でもなく「目」の研究に携わっています。私の上司は日本人で、成長・発達や老化あるいは病気に関わる遺伝子を、遺伝子変異マウスを用いて解明するのが彼の大きな研究テーマです。私はこれまで主に脳などの中枢神経の研究を行っていたのですが、なかなか自分の研究テーマを確立することが出来ず、留学を機に新たな知識や技術を身につけ、もう一度自分の研究を見直そうと思い留学先を探していました。そんな折たまたまインターネットで見つけた Post-doctoral fellow の募集に応募したのがことの始まりでした。今考えても何の面識もなく、遺伝学の経験のない、しかも歯科医である僕をよく採用したなあと思うます。私のここでの研究テーマは目の網膜の神経が通常より早く老化してしまう突然変異マウスの変異遺伝子を見つけることと、その遺伝子の機能を解析することです。渡米当初は分子生物学ましてや遺伝学の知識もなく、日本から持ってきた「遺伝学」の本を片手に、いろいろな事を少しずつ教えてもらいながらのスタートでしたが、なんとか変異遺伝子を見つける事ができ、現在はその機能解析を進めているところです。最近この遺伝子が「目」のみならず全身の神経の老化に関与している可能性を示唆する実験結果も得られ、幅広く実験を進めています。

今回の留学は、留学初日から妻と子供2人とでのスタートでした。最初はそれぞれいろいろと苦労もあったと思いますが、今ではそれぞれが海外での生活を楽しんでいます。特に上の娘は渡米時に5歳で、こちらへ来て2週間後には学校へ入れられ(こちらは日本より一年早くいわゆる義務教育のようなものが始まります)、訳の分からない毎日を強いられたはずですが、今では我が家で一番英語が堪能です。子供達の適応力、吸収力には驚かされます。もう少し大きくなれば通訳をお願いしようと思うのですが、その頃には日本にいないことになるので、覚えた英語も忘れてしまっていることでしょう。

帰国後は、ここで得たことをいかに自分の仕事や生活に生かしていくかが課題ですが、今はあまり先のことは考え過ぎず、残されたアメリカでの生活を謳歌しようと思っています。帰国後皆さんにお会い出来る日を楽しみしています。



冬のマディソン。中央やや右に見える高い建物が state capital (州議会場)。手前に一面広がっているのは凍った湖です。

“Where is Oshin”

Tarek Abdulsamad Balam
Department of Orthodontics
Okayama University

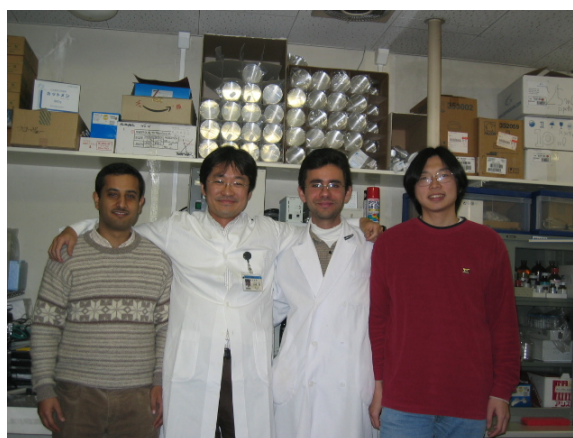
I am Tarek from Libya. Libya, which has become famous these days, is located in the north of Africa, between Egypt and Algeria. It is an Arabic country whose people speak the Arabic language.

I first came to Japan in October of 2000 as a Monbusho Ph.D. Scholar. The image of Japan in my country is that it is a well developed country especially in terms of cars and electronic goods. However, before coming to Japan, I watched the Oshin Japanese drama, so my image of Japan was related to Oshin. When I came to Japan, I always wondered “where is Oshin”.

I spent 4 years and half years in Okayama which I can say, was the most important stage in my life. I learned a lot of things which I would not have learned if I stayed in my country. During that time, I learned about the Japanese culture which I respect in many aspects. Japanese people, in general, are hard workers, faithful in their work, follow the system and their superiors, respect each other and also respect the foreigners.

I returned back to my country in 2005, and then got job as a lecturer at Garyounis University, in Benghazi-Libya. Then in 2010, I got scholarship from the Arab Fund Fellowship Program to do research for one year, so without hesitation, I chose Okayama University which I liked and Okayama city, being very convenient and safe for students.

Thus, I would like to express my gratitude to the Monbusho Scholarship Program for accepting me, my sincerest gratitude to Professor Teruko Takano-Yamamoto, whom I respect very much, and likewise to Professor Takashi Yamashiro for his unending support during my Ph.D. and much more for welcoming me back to continue my 1-year program. Finally, my thanks to all the members of the Department of Orthodontics for their kindness and support and to the Arab Fund Program for giving me another chance to further expand my research skills and be able to return back to the lovely city of “Okayama”



「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

口腔生化学分野
河田 かずみ

この度は岡山歯学会奨励賞に選出していただき、岡山歯学会会員の先生方には大変感謝しております。受賞の対象となったのは“Kawata K et al : Role of the low-density lipoprotein receptor-related protein-1 in regulation of chondrocyte differentiation. Journal of Cellular Physiology. 2010 Jan ; 222 (1) : 138-148.”です。賞をいただいたことを大変光栄に感じております。

私は岡山大学大学院医歯学総合研究科時代に軟骨の研究の基礎を学び、特に成長板軟骨における低密度リポタンパク質受容体関連タンパク質-1 (LRP-1) に注目して研究を行いました。LRP-1 は様々なシグナル伝達を媒介する受容体で、身体全体にわたり LRP-1 遺伝子のすべてをノックアウトしたマウスは着床期に発生が進まず死亡することや、血管内皮細胞特異的に LRP-1 遺伝子を発現ノックアウトしたマウスでは動脈硬化が促進することなど、全身における LRP-1 の機能の重要性が報告されていました。その様な状況下で、私達は本論文以前に軟骨組織・細胞での LRP-1 の発現・局在を明らかにしていたものの、LRP-1 の軟骨細胞における機能については明らかに出来ていませんでした。しかし、本論文ではついに LRP-1 が古典的 WNT/経路、さらには PKC 経路をも調節することによって軟骨細胞分化を制御していることを示す所見を得ることが出来ました。この研究成果を基盤として、顎関節症でダメージを受けた軟骨組織を再生させる新たな治療方法を開拓することは、今後の大きな課題のひとつです。

今後は今回の受賞を励みにし、尚一層努力してまいりたいと思います。現在私は、軟骨組織特異的に LRP-1 遺伝子をノックアウトしたマウスの作製し、in vivo での軟骨分化における LRP-1 の機能解析を行っております。もし、同じ研究分野や御興味のある先生方がおられましたら共同研究ができればと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、様々な機会を与えていただきました滝川正春教授、久保田聡准教授、ならびに御指導、御協力いただいた多くの共同研究者の方々にこの場をお借りして感謝いたします。

「学位論文～カナダからの手紙～岡山歯学会奨励論文賞」

予防歯科学分野
江國 大輔



【回想】

「研究は世界に貢献できる」・・・
カナダのブリティッシュコロンビア大学の
Putnins 先生の言葉を思い出す。

この度、以下の論文で岡山歯学会から奨励論文賞を
頂くことになり、大変光栄に感じております。

Ekuni D, Firth JD, Nayer T, Tomofuji T, Sanbe T, Irie K,
Yamamoto T, Oka T, Liu Z, Vielkind J, Putnins EE.
Lipopolysaccharide-induced epithelial monoamine
oxidase mediates alveolar bone loss in a rat chronic
wound model. Am J Pathol. 2009; 175 (4): 1398-1409.

内容：リポポリサッカライドという毒素をラットの歯肉溝に塗布すると、接合上皮のダウングロースと骨吸収が誘導される。その際にモノアミンオキシダーゼが、歯肉のサイトカインや酸化ストレスの誘導に関与していることがわかった。モノアミンオキシダーゼの阻害剤を投与すると接合上皮のダウングロースと骨吸収が緩和された。また、上皮系の培養細胞でも、リポポリサッカライドによるモノアミンオキシダーゼの発現とともにサイトカインや酸化ストレスの誘導が確認され、さらにモノアミンオキシダーゼ阻害剤でサイトカイン産生が抑制された。

【エピソード】

きっかけは、自分の学位論文の内容を前山本龍生講師が IADR で発表したときにカナダのブリティッシュコロンビア大学の Putnins 先生が尋ねたことだった。2002 年サンディエゴに春を告げる頃だった。

【あらすじ】

ワインは何年もの？お酒の飲めない自分に答えはわかりませんが、この論文は 5 年ものです。2003 年にカナダから依頼が来て、2004 年からブリティッシュコロンビア大学でプロジェクトをスタートさせました。2005 年の 3 月までの 1 年間では終わらず、日本に帰ってからも共同実験が続きました。その間に、岡山大学医学部の病理教室にもお世話になりました。2006 年 7 月～8 月には再びカナダで仕事を行い、日本に帰ってもさらに追加実験を行いました。そして、2009 年に掲載となりました。

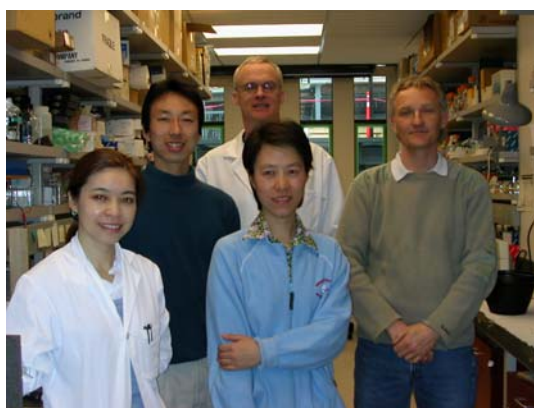
【プロローグ】

院生のころとカナダで仕事をしていたときは基礎研究にどっぷり。現在は臨床家とし

て、診療に隠れているヒントや疑問と向かい合う毎日。公衆衛生の向上および増進に寄与すべく臨床・疫学研究に携わりながら、カナダとの共同研究や動物実験も続けている。いつかヘルスプロバイダーと呼ばれる存在となることを目指しながら・・・

【謝辞】

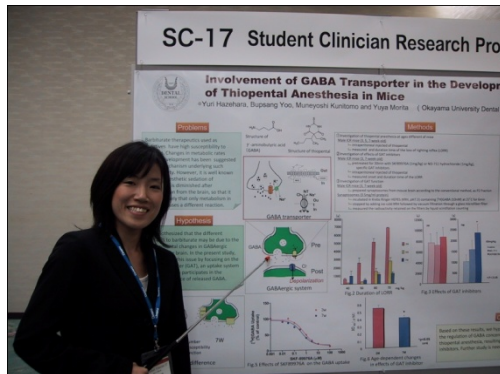
受賞にあたり、日々お世話になっている関係者の皆様には、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。最後に、指導頂きましたEdward. E. Putnins先生、岡山大学名誉教授の渡邊達夫先生、現教授の森田学先生をはじめ、多くの先生方に深謝致します。



バンクーバー島

「Student Clinician Research Programに出場して」

岡山大学歯学部歯学科 4 年
 樋原 由理



2010 年（平成 22 年）8 月 20 日に東京で開催されました、日本歯科医師会主催 Student Clinician Research Program 日本代表選抜大会にて基礎部門第 2 位を頂きました。この大会は、世界中の歯学部学生による研究成果の発表と実演の場として毎年開催されており、日本代表選抜大会で優勝するとアメリカ歯科医師会総会にて発表することができます。ポスター発表形式で、英語で発表し、質疑応答の時間もあります。自分の発表時間以外は他大学の学生の発表を聞くことができ、研究内容やプレゼンテーション、英語力に刺激をうけました。審査を終えるまで出場者は、お互いの出身大学と名前などふせていなければならなかったのも、休憩時間や昼食時の会話もなんだかぎこちない雰囲気でした。一方、審査では、フランクな質問でこちらの緊張をほぐそうとしてくれる先生から、いきなりずっしりした内容の質問をされる先生がいらっしゃいました。自分たちの研究が今後、臨床にどのようにつながっていくと思うか？ということに重点を置いた質問が多かったです。審査が全て終わると、一般公開の時間があり、各大学の先生達の前で日本語でも発表しました。このような独特の雰囲気と、緊張感をもったポスター発表だったので、審査や一般公開が終わった後は、出場者同士がすぐに打ち解けあいました。大学も学年も異なる「同期」ができ、しかも学生の中に発表ができる機会を与えていただけたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。

さて、今回発表させていただいたのは、3 年の 3 クォーター時に研究室配属で取り組んだ「チオペンタール麻酔作用のマウス週齢差における GABA トランスポーターの関与」についてです。もともと薬理学が苦手な私にとって、配属期間中は毎日が「口頭試問」の連続でした。理解がたらない所は、生理学や生化学の授業プリントを見直しました。そしてまた次の日には新たな課題がでて歯科薬理学の教科書を読み直しました。この大会が出席することができ、受賞することができたのは、この日々があったからであると思います。熱心にご指導いただきました歯科薬理学教室の北山滋雄教授、十川紀夫准教授、十川千春先生、大山和美先生に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

「症例検討会における効果的なファシリテーションを考える」

卒後臨床研修センター歯科研修部門 副部門長
総合歯科 副科長 白井 肇

歯科研修センター室が1Fから2Fへと移転して、丸1年が経過した。歯科研修医の居住環境は大きく改善し、快適なものとなったが、それにも増して変化があったのは、我々専任教員の健康状態であると感じている。私自身がここ数年間感じていた原因不明の胸の痛みや呼吸器の症状は、全く消退し、陽のあたらない一人当たりの専有面積が約1m³の狭い居住環境は、知らず知らずのうちに、健康障害をもたらしていたのだと実感した。そして、この1年で労働衛生管理の重要性を自分自身の身をもって体感するとともに、移転することが実現したことに対して、関係各位の皆さまに感謝した1年であった。

2階に移動した新研修センター室入口には、「卒後臨床研修センター歯科研修部門」のプレートも据え付けられ、外部からの来訪者や見学者に対しても体裁の整ったものになった。また、室内では、コンピュータに加えて、毎年度毎に買いためた参考図書も年々充実し、学習環境が整ってきたことを実感している。さらに加えて本年度からは、対外的に評判の高い岡山大学独自のポートフォリオシステムである”Resident”に、居室内オンデマンドの動画教材も機能追加し、歯科研修医の学習環境として、より充実したものになってきている。

今年度は月に1度、この広くなった研修センター室内で、歯科研修医主催による症例検討会を開催してきた。この会は、毎年度末に4日間にわたって開催している症例発表会とは別に、月に一度、実際に研修医に配当された症例をスライドとして相互提示して、それをもとに討論するという会であるが、症例の見方が集団として同じ方向を向いている医局での症例検討会とは違って、指導医として間接的にコメントを出すことがとても難しかった。そんな中で、歯科研修医の積極的姿勢を伸ばす効果的なファシリテーションとは何か？ということのを常に考えさせられたのである。

ファシリテーションとは、“会議、ミーティング等の場で、発言や参加を促したり、話の流れを整理したり、参加者の認識の一致を確認したりする行為で介入し、合意形成や相互理解をサポートすることにより、組織や参加者の活性化、協働を促進させる手法・技術・行為の総称。”とあるが、症例検討会の場で、この様に生きたコメントを出すことが非常に難しいことに今更ながら気付かされた。本会は、症例の見方という観点において、勉強になる点が多いので、来年度も研修医の自主性を重んじつつ、続けていこうと思っている。

最後に、卒後臨床研修センターは、岡山大学病院の基本方針の一つである“創造力豊かな医療人の育成”に最も大きくかかわっている部署であり、研修は、臨床系各診療科の指導医の先生方の情熱とご協力なしには成り立つものではない。我々はこれからも、特色のあるOnly Oneの研修センターを目指して頑張っていく所存であるので、これからも歯科医師臨床研修に対してご理解とご協力をよろしくお願いしたい。

「私の大学院生ライフ」

歯科矯正学分野
保崎 留美子



以前、この歯学便りに投稿させていただいたのは、私がまだ大学 3 年生で研究室配属をしていた頃でした。あれから月日は流れ…どのくらい流れたかは計算したくありませんが、私は昨年春から歯科矯正学分野で大学院生として新たな生活をスタートさせました。

歯科矯正学では、大学院入学後すぐに矯正歯科診療を行うのではなく、まず各ライターによる講義、実習等を受け、そこで合格をもらって初めて患者配当を受けることができます。よって、合格がもらえるまでの間はひたすら英語論文を読んだり、ワイヤーを曲げたりと根性が試される作業が続きます。時々、腐りそうにもなりましたが、同級生と励まし合ったり、先輩にアドバイスをいただくなどして、なんとか乗り

切ることができました。また、秋頃から研究に参加させてもらい、実際に細胞培養等を学ぶことができました。

今思い返せば、この 1 年は本当にあっという間だったなと思います。そして、1 年経ってあらためて感じることは、私は矯正歯科が好きだなということです。まだまだ勉強不足で、頭の中は毎日ハテナが飛び交っていますが、疑問が解決した時や、実際に思い通りに歯が動いてくれた時はとても嬉しく充実感があります。また、今まで以上に他科の先生方に、診療について相談させていただく機会が増え、とても勉強になります。

まだまだ始まったばかりの大学院ライフですが、健康に気をつけて頑張っていきたいと思います。医局の皆さま、至らないところだらけの私ですが、これからも末長くよろしく願いいたします。

「歯科衛生士の活動報告」

歯科衛生士室
三浦 留美・高橋 明子

＊ P E R I O（周術期管理センター）における活動＊

当院には、組織横断的に業務を行い手術を受ける患者に対して快適で安全・安心な手術と周術期環境を効率的に提供するためP E R I O（周術期管理センター）が設置されています。その中で歯科衛生士は、術後の合併症予防のため術前に口腔清掃指導やプラークフリーを担当し、チーム医療に貢献しています。



	担当歯科衛生士
月曜日	蟻正
火曜日	三宅
水曜日	住吉
木曜日	三浦
金曜日	高橋

＊ コメディカルスタッフとして三浦 留美・蟻正 桂子が初の教育功労賞受賞＊



岡山大学病院総合歯科は、歯学部卒前臨床実習および歯科医師卒後臨床研修の主たる診療室となっております。歯学部学生約60名、および研修歯科医師約60名の総計120名が、日々臨床実習、臨床研修を行っています。当診療室には歯学部卒前臨床実習の専任教員は配置されておらずコメディカルスタッフとして、歯科衛生士が平成17年より 総合歯科に専従しています。主に、私たちは、卒前臨床実習

学生に対して、臨床実習における器具や器材の準備、管理やその使用方法等について指導させていただいています。また、歯学部卒前臨床実習生の毎日の出席管理も行い、実習生が病欠欠席等や突発的事故に遭遇した際には 緊急的対応と学務課教務グループ歯学部担当者へ連絡等を行っています。

そして歯学部教務委員会下部組織の臨床実習実施部会にも出席させていただき、教育の一端を担わせていただいております。これらの業務を評価いただき、このような素晴らしい賞をいただく事ができました。今後も、卒前臨床実習生、卒後研修歯科医師の方々に教科書だけでは学べないことを一緒に学んでいけたら、と思っております。このたびは 本当にありがとうございました。

「技工室の近況」

歯科技工室
神 桂二

平成17年岡山大学歯学部附属病院から岡山大学医学部・歯学部附属病院（岡山大学病院）となり、歯科だけでなく医科の業務にも携わるようになりました。本来、歯科技工士とは、もの作りを業とする歯科だけに特化した職業でありましたが、総合病院の様々な分野と連携して施術手術に必要とされる三次元実体模型の製作や、周術期管理センターから依頼される歯牙損傷防止プロテクターの作製などの診療支援を行うようになりました。

特に三次元実体模型については、顎骨や頭蓋骨に限らず、脊柱、股関節などの製作および再建装置のプレベンディングやモデルサージェリーなど、施術支援の領域が大きく広がりました。（図1）。

また、歯科分野では従来の義歯や歯科修復物作製などの他に、睡眠時無呼吸症候群治療用装置やエピテーゼ（顔面欠損の修復物）およびCAD/CAMを用いたインプラント技工やジルコニアを用いた修復物作製などの最先端の技工物製作業務に携わっております（図2）。

今年度から技工室長に窪木拓男教授（補綴科「クラウン・ブリッジ」）が就任され、また、開院から職員6名の構成員でしたが、27年目にして特別契約職員1名が増員され、新体制となりました。（図3）。

私たちは、歯科・医科にかかわらず幅広く、歯科技工士ができる診療支援を積極的に行って参りたいと考えております。

今後ともどうぞ宜しくお願いします。

図の説明

図1 技工室で作製した様々な3Dモデル

図2 睡眠時無呼吸症治療用口腔内アプライアンス (A)、試作エビテーゼ (B)、インプラント技工 (C) やジルコニアクラウン (D)

図3 技工室



図1



図2



図3

「 「スペシャルニーズ歯科センター」の設立と御紹介 」

スペシャルニーズ歯科センター
センター長 江草正彦

「スペシャルニーズ歯科センター」って何？と思われる先生方に設立経緯をお話させていただきます。

図1のように1981年に国際障害者年の翌年、岡山大学歯学部附属病院開院と同時に総合診療室という名称で障害者歯科診療が始まりました。1997年には特殊歯科総合治療部に改編され、2003年には中四国地方の歯科医療機関では初の摂食・嚥下リハビリテーション診療室を立ち上げ、今では医科歯科連携の要の一つになっています。

また歯科麻酔科との連携での全身麻酔法・静脈内鎮静法下での治療にもより、ここ12年間で患者数は7倍の年間5000人を超え、中四国地方では最大規模の障害者歯科診療室に成長しました。

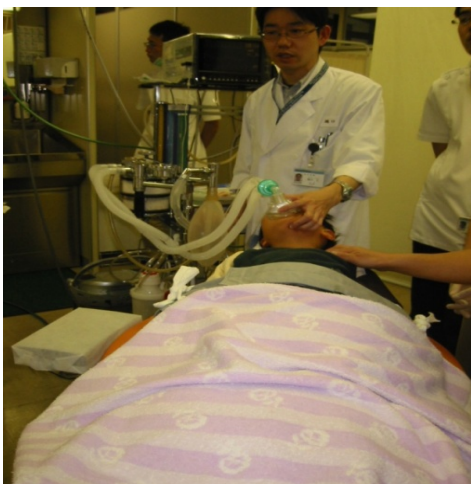
そして22年12月には、特殊歯科総合治療部の組織再編で第一総合診療室（障害者歯科治療部門・摂食嚥下リハビリテーション部門）が独立したセンターになりました。名称を決める際にたくさんの候補がでしたが、日本初のネーミングとこれからの時代の潮流を考え「スペシャルニーズ歯科センター」となりました。

今後、急速な高齢化社会へと移行し認知症をはじめとする高齢知的障害者などの要介護高齢者や早期診断の普及による発達障害者の増加により、身体的、精神的、心理的に種々の障害や疾患のある歯科的に「スペシャルニーズのある人」に対して、口腔の健康維持を目指したケア・リハビリが医療・保健・福祉などの他の領域と連携することが求められています。

スペシャルニーズ歯科センターは歯科における地域連携のフロントランナーとして「キューア」「ケア」「リハビリテーション」においてのどの分野でも地域医療連携がとれるような、クリニカルパスの構築を早急におこなっています。

1981年:国際障害者年
1982年:岡山大学歯学部附属病院 開院
総合診療室開設
1997年:特殊歯科総合治療部に改編
・第一総合診療室(障害者歯科診療室)
・第二総合診療室(感染症有病者歯科診療室)
・第三総合診療室(全身疾患有病者歯科診療室)
2003年:摂食・嚥下リハビリテーション診療室 開設
2010年:スペシャルニーズ歯科センター(旧第一総合診療室)
・特別支援歯科診療部門
・摂食・嚥下リハビリテーション部門

図1. スペシャルニーズ歯科センター設立の経緯



日帰り全身麻酔下の歯科治療



摂食・嚥下リハビリテーション

[診療内容]

- ・ 特別支援歯科治療部門（旧 障害者歯科治療部門）
- ・ 摂食・嚥下リハビリテーション部門

（いずれも初診から予約制になっていきますのでご連絡お願いします。TEL：086－235-6817）

「歯科の専門性をチーム医療に生かす—医療支援歯科治療部」

周術期管理センター歯科部門
部門長 曾我 賢彦

ここ数年、毎年この歯学便りで執筆の機会を頂いております。昨年、一昨年と、歯科の専門性を岡山大学病院で展開されるチーム医療に生かす活動を行っている旨をご紹介させていただきました。歯科医師の専門性は、病院医療の意外なところで驚くほど役に立つことを知りました。血液・腫瘍内科で成功した口腔内の感染管理（歯周病等の菌性感染巣のみならず、抗がん剤等の副作用で生じる口腔粘膜炎症等の管理もです。）における医療連携の噂で、様々な科などから声をかけていただくようになりました。小児血液疾患、集中治療部、肝胆膵外科や泌尿器科の肝・腎移植医療、心臓血管外科の弁膜症手術などに関わり始め、同僚とともに活動を展開しています。

本院は2年前から周術期管理センターを設立し、様々な専門職でのチーム医療で、効率的かつ効果的な周術期管理を目指しています。そのチームの一員としても活躍する機会を頂きました。同センターの歯科部門長を拝命するに至りました。歯科部門は、歯科系の各専門分野から兼任のスタッフで構成され、咀嚼機能の維持・回復と経口栄養ルートの確保や、人工呼吸器関連肺炎の予防そして気管挿管時の歯牙破折の予防（マウスプロテクター作製）などを行っています。

2010年12月に、特殊歯科総合治療部が改組・改変され、岡山大学病院に「医療支援歯科治療部」なる診療部が誕生しました。旧第二総合診療室の業務をさらに発展させ、本院で行われる高度な医療を歯科の専門性からサポートする拠点としての役割が期待されています。部長は歯科系代表副院長が兼任で努め、近々私が専任で歯周科からこの治療部へ異動することが内定しています。予防歯科の山中先生も異動され、部員としてご活躍頂ける予定です。病院から、このような仕事を専任でやれという後押しを頂いたことは非常に嬉しいことです。今年の年始に引いたおみくじは「小吉」、「労多くして困憊するが（！！）後には何事も調いよい成果を得る」だそうです。神も良い成果を保証して下さっているようです。本院の「医療支援歯科治療」を行うにはマンパワーとハード面をさらに整える必要があります。大変な仕事ですが、よりよい医療の創造のために邁進して参ります。



編集後記

なんとか本年度中に「歯学便り」を発刊する事が出来ました。これもひとえにお忙し中、急な執筆依頼に嫌な顔一つせずご快諾いただいた諸先生方のおかげです。私自身は原稿依頼で各科を廻る中で、他大学から来られた先生方や他の施設でご活躍中の先生方との交流を深める事ができ、非常に良い機会を与えて頂いたと思っております。最後になりましたが貴重なお時間を頂き、原稿を執筆いただいた諸先生方に心よりお礼を申し上げます。

編集 本城 正



歯科系広報専門部会

部会長	窪木 拓男
総合歯科(歯科研修部門)	白井 肇
むし歯科	神農 泰生
歯周科	谷本 一郎
補綴科(クラウンブリッジ)	水口 一
補綴科(咬合・義歯)	洲脇 道弘
口腔外科(再建系)	水川 展吉
口腔外科(病態系)	岸本 晃司
歯科放射線科	此内 浩信
予防歯科	江國 大輔
小児歯科	假谷 直之
矯正歯科	本城 正
特殊歯科総合治療部	森 貴幸
歯科衛生士室	高橋 明子
技工室	神 桂二
医療情報部(歯系)	小河 達之